その他

日本語教師の力量形成へのライフヒストリー的アプローチ
―授業スタイルの形成と変容に焦点をあてて―

康　鳳麗[1)]，森脇　健夫[2)]，坂本　勝信[3)]，井高　節子[4)]，和田　明子[4)]

[1)]鈴鹿医療科学大学
[2)]三重大学
[3)]常葉学園大学
[4)]四日市日本語学校

Ⅰ　はじめに

近年，教師の力量形成モデルとして，従来の「技術的熟達者」モデルに対して「反省的実践家」モデルが提起されている[1)]。後者のモデルは，教師の力量形成過程を単に技術の習得過程として描くのではなく，さまざまな「できごと」との出会い，問題解決の中で，実践知形成を核とする過程として描こうとする。研究方法論としてその際に用いられる有力な方法論が教師のライフヒストリー的アプローチである[2)]。この研究の成果に依拠しながら，私たちは日本語教師の力量形成をライフヒストリー的アプローチによって明らかにしたい。日本語教師はどのように自分のキャリアを形成していくのか，とりわけ，授業を行う力量をどのように身につけていくのか？　教育経験はどのような力量形成につながっているのかを検討してみたいと思う。日本語教師のライフヒストリー研究としては，自己修養の方法論として用いた横溝[3)]の研究があるが，本稿ではとくに教師の授業スタイルの形成と変容に焦点をあてる。授業スタイルの形成，変容が力量形成の一端を示すと考えるからである。本稿では授業スタイルを「その教師が授業を構想し，教材づくりや授業を行う際に見られる特徴のある『一貫性』」[4)]と定義しておく。この研究の直接の先行研究は，教師論としてのライフヒストリー研究，教育方法学の授業研究をクロスさせた，森脇[6)]ほかの研究であり，これらの日本語教師研究への援用という意味を持っている。

授業スタイルの確立と教師の力量形成の関係を図示してみよう。従来の力量形成の考え方においては，経験の量や質と教師の力量が比例関係にあるのに対し，授業スタイルの形成を力量形成の核とする考え方においては，できごととの出会いやその省察を通して教師は実践知を得ながら自らの授業スタイルを形成し，その授業スタイルは一定の期間は安定的に機能し，そして新たな出来事と出会って新たな授業スタイルを形成していくというサイクルを繰り返す。このようなとらえかたにおいては，必ずしも経験の量や質は教師の力量形成と比例するわけではない（図１）。

Ⅱ　対象

Ｙ日本語学校のＡさん・Ｂさんの二人の日本語教師をとりあげる。Ａさんは教歴 11 年，Ｂさんは教歴８年である。

研究方法については，授業スタイルに焦点を当てた

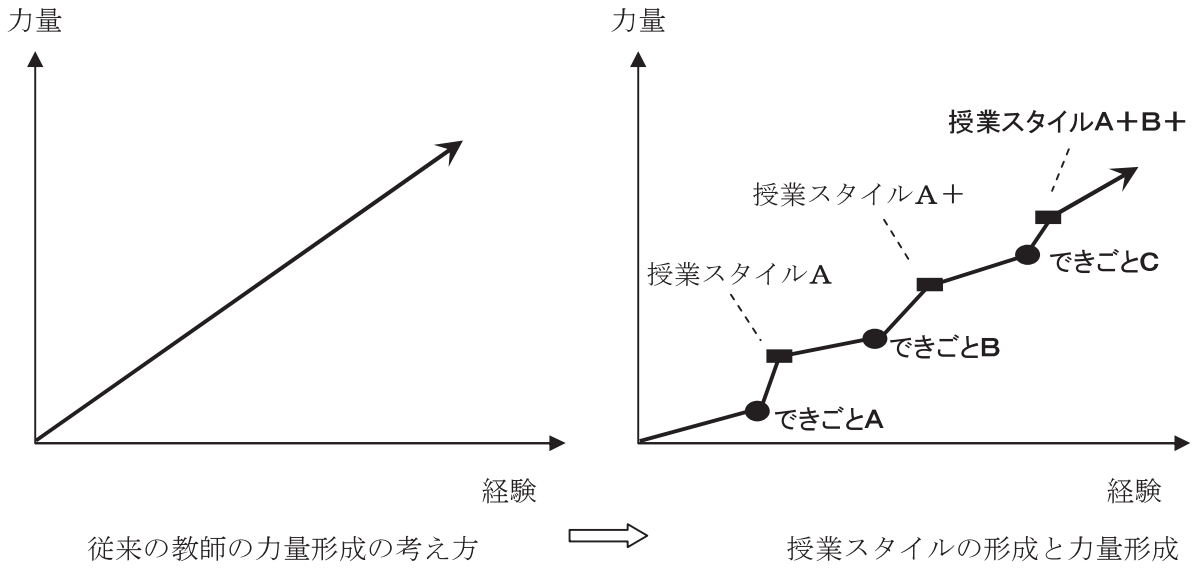

図1

ライフヒストリー的アプローチをとる。**ライフヒストリー的アプローチ**とは，教師のライフストーリー（教師の「語り」）を一つの基本資料にしながらも，教師自身の実践記録や分析者の観察記録によって，トライアンギュレーション的に基礎づけ，教師としてのカリキュラム経験と授業変革の歴史を，授業事実のレベルで丹念に洗い出そうという試みである。

この方法をとる理由は，ライフヒストリー的アプローチは長いスパンにおける授業スタイルの形成と変容を明らかにしうるアプローチであるからだ[5]。

Ⅲ　研究の手続き

授業への参加観察，教師への半構造化インタビュー[7]，授業者との対話と授業者の研究過程への参加と質的研究法を用いる。具体的には，2006年5月から2007年2月にわたり，まずは2回ずつY日本語学校のA教師とB教師の授業を参加観察し，授業観察後1回目の半構造化インタビューを行った。授業とインタビューデータをすべて文字化し，インタビュイーのチェックを受けた後，3回目の授業参観と2回目のインタビューを行った。そのデータをもとにA教師とB教師それぞれの授業スタイルの析出及びその授業スタイルの形成と変容について検討･考察を行った。

半構造化インタビューにおいて，私たちはあらかじめインタビュー項目を絞り込んだ上でインタビュイーに渡し，インタビューを行った。具体的には以下のようなインタビュー項目を作成し，研究協力の依頼の際に提示した。

1）これまでの日本語教育に関わる経歴について。
2）現在の授業スタイルの形成過程について。
3）日本語教師として実践を行う中で，学生たちの到達点として目標としていることについて。
4）授業環境によって先生自身の中で「変わった」と思われるもの及びその経緯について。
5）先生自身の授業づくりのポリシーについて。
6）授業実践のなかで感じている課題について。
7）日本語教育への提案，あるいは，今後の授業実践について。
8）その他

Ⅳ　事例研究

Ⅳ-1　二人の日本語学校教師の授業スタイルについて

二人の日本語学校教師の授業スタイルについて，授業参観において析出できたそれぞれの特徴をまずあげ

てみたい。

Ⅳ-1-1　A さん

A さんの授業の特徴は，生徒と適度な距離を保ちながら，構造的，的確に言語事項を正確にかつ丁寧にかつ過不足なく教えていることである。生徒の生活や思いを授業の中で取り上げることもあるが，あくまでもそれは教授事項に関連してであり，逸脱の方向には流れない。具体的には以下の三点を指摘することができる。

①　１つ１つの学習項目の丁寧な押さえ

教室で使う言葉が非常に分かりやすくて，１つ１つ丁寧に，端的に，過不足なく説明されている。学習項目は学生への質問によって意味確認と理解をさせ，また，必要に応じて質問しながら関係図などを板書するなど，一連の活動の中で学生の自らの気づきと理解を促すという特徴が見られる。

②「本筋」と「脱線」の区別

教科書から離れるときは，声音を変えたりしてその話をし，本筋と脱線を区別している。教科書通りに授業を淡々と進めていくのではなく，教科書内容と関連して自分自身のことを話したり，実際に学習者自身のことを聞けそうな場合は学習者に質問を投げかけたり，雰囲気を和らげるために少々冗談を言ったりする。そして教科書から離れるとき，また，注意するときなど，声音を変えている。

③　教室全体の雰囲気へのさりげない気遣い

力に差のある学生に個別に対応している。とくに「できない」学生に威圧感を与えたり，学生同士に差を感じさせたり，傷をつけたりしないようにさりげなく気を配っている。例えば，堅苦しい質問が苦手な学生に対して，正解を確認してから当てたり，話が分かった喜びを味わってもらうために，冗談やくだけたことを言うときにあてたりしている。

Ⅳ-1-2　B さん

B さんの授業の特徴は，生徒との物理的，心理的距離が近いことであろう。もちろん基本的な事項についての的確な説明といった基礎基本については，A さん同様押さえてはいるが，B さんの場合は生徒との身体的接触も多いし，心理的距離の近さを感じる。具体的には以下の三点を挙げることができる。

①　対話的な授業

授業が対話的に進められている。授業中，絶えず学生に話をさせるようにするし，学生のほうからも自らその話題について話しをすることが多い。学生に話をさせることは意図的であり，「学生のいろんな経験を引き出して，自分の言葉で自分の話したいことを話せるようになったら嬉しいし，自分の話だから，嫌でも考えないといけない。さらに，それで覚えられたものはまたほかでも使えると思ってもらえるとまたラッキー」と述べる。（１回目のインタビューより）

②　学生との親密さ（物理的，心理的距離の近さ）

B さんの受け持つ３つのクラスのうちの２つを見学した。学生の個性もクラス全体の雰囲気も違うものの，スキンシップがはかられているところは同じだった。「低年齢化の学生に子ども扱い」をしているということがあると本人は言っているが，それはかなりの信頼関係ができていなければできることではないと思われる。

③　輻輳的な教室空間

私たちが見学をしたクラスには何人か冗談が好きな生徒がいて，授業中，その子たちとのやりとりの中でローカルな笑いが起き，さらに授業全体としては教科書内容と生徒たちの関係性が築かれているという複雑な文脈が観られる。

Ⅳ-2　ライフヒストリー的アプローチによる授業スタイルの形成過程の析出

Ⅳ-2-1　A さん

A さんのライフヒストリーと授業のスタイルの形成には，「自由な発言と『脱線』」，「手段としてのたと

え話」がキーワードとなる。

A さんは，高校の時から日本語教師という職業に興味関心を持ち始めたという。日本語教師になるために大学（文学部国文学科）に入り，大学卒業後，日本語教師養成講座に通いながら日本語教師（非常勤講師）を始めた。その後，青年海外協力隊を経て日本語学校でしばらく非常勤講師をして専任教員になった。新任時は，「自信もないし学生は自分より年上だし，必死という感じ」という A さんが，帰国後３年目くらいのときから経験の中で慣れてきたという。「私語はないけどにぎやかなクラス」を目標としているが，その理由は「萎縮させると発言も引き出せないし，かといって，自由に話させるのも筋と離れるので，授業の展開の中で学生が遠慮なく自分の意見をどんどん出せる授業がしたい」からだと語っている。（１回目のインタビューより）

また，例文の出し方について，最初の頃の A さんは，例文を自分で作って出すというのに自信がないため文法の解説書に載っているものをそのまま使っていた。しかし，その文に学生の知らない言葉が入っていたりすることがよくあり，その学生の知らない言葉を説明しているうちに，一番教えなくてはならない部分が薄れてしまうということがよくあったと言う。それも今は，必要に応じてプライベートの話をしたり，学生自身のことを聞いたり，そして，学生の一番理解しやすい身近な場面や状況を設定して例文を出したりすることができるようになった。（２回目のインタビューと授業記録（「敬語」「預かる」など）より）つまり，教授事項に関連した的確なエピソードを準備できるようになったと言う。

Ⅳ-2-2　B さん

B さんのライフヒストリーと授業のスタイルの形成の関係においては，「楽しい授業へのあこがれ」，「学生の話題のピックアップとコントロール」がキーワードとなると考えられる。

短大の国文学科を卒業した B さんは，日本語教師という職業に本屋で出会った。漠然と海外に行きたいと思っていた時に，「海外で働くには」といった内容の雑誌を見つけたのだという。その後日本語教師養成講座に入って検定試験に合格した。養成講座修了後，海外に行かずに現在の日本語学校で３年間の非常勤講師を経て専任教員になった。クラス全員が積極的に参加する，楽しい授業を理想の授業としている。そんな B さんだが，日本語教師になって最初の頃は，決められた内容をそのまま教科書通りに，言われた通りに教えていた。それだけで必死で精一杯だった。それも３年目頃から授業に関して余裕ができ，個々の学生への対応やクラスの運営などをできるようになったと言う。そのときから，授業スタイルに変化が現われた。まずは，学生から出た話題については，「すべて拾い上げる」ことをしたがそれでは教室が乱れることから今度は，クラス全員に共有してもらったりとそうでなかったり全体を見合わせて必要に応じて「コントロール」することができるようになった。また，もう一つ大きな変化は，「学生の笑っている顔を見るのが楽しい，本当に楽しい授業がしたい」という気持ちが生まれ，授業で「笑いをとりたい」と思うようになり，それを毎日の授業で実践するようになったことである。

B さんは日々の授業実践から得られた認識について，「教師としてのレベルアップとは，言語的な知識だけではなくて，個性的な授業，学生をひきつける技などクラス経営，つまり，その知識を教えるための方法，いわゆる，方法論が求められる」と語っている。（２回目のインタビューより）

Ⅳ-3　両者の特徴，および形成要因について

以上，Y 日本語学校の同僚である A さんと B さんの授業スタイルを見てきた。二人は，同じ教育機関で日本語教師を仕事として始め，日本語教師歴は３年弱違うが，決まったカリキュラムの中で同じ教科書を使い，学生を教えている。また，同じ先輩，教師仲間を持っていて，６年間互いに学び合い，刺激を受け合ってきた。とくに先輩の C 先生は二人にとって共通のモデルとなった。

しかし，二人の授業を比較対照させてみると，その

授業スタイルに共通する部分もあるが，大きな違いも見られた。つまり日本語能力試験，日本留学試験の目標を持って，言語・文法・会話・聴解能力を合格水準まで引き上げるために基礎・基本をきちんと身につけさせるという授業スタイルは共通のものがあるが，一方，生徒との物理的距離，心理的距離のとり方については極めて対照的である。

Ⅳ-4　二人の教師の授業スタイルに影響を与えたと思われる点

① 自分の被教育体験の影響

まずは二人の授業に共通していることである。２人の授業からは，いわゆる「教師らしさ」，すなわち，権威や権力をもとに教えるべきことを過不足なく教えるということは感じられない。学生の自由な発言に対して二人とも許容的である。このことに関してＡさんとＢさんとともに教師らしさを演じようと思わないと言っていた。Ａさんは教師らしさにはあまりこだわっていなくて学生にきちんと日本語を分かりやすく教えればいいと考えている。

一方，Ｂさんは今の教師としての自分の姿を自身の学校経験が影響していると考えており，「こんな教師がいていいのかという教師が担任であったり」，「私が思っている一般的に教師っぽい先生というのに対するちょっと私の反動がある」と語ってくれた。

② モデルの存在（あこがれ）と自分のスタイルの自覚

ＡさんもＢさんも新任時から先輩教師からいろいろなことを学び，「あのときがあって今の自分がある」と言ってはいるが，二人ともその先輩のようになろうとは思っていないようだ。その理由については，Ａさんは，先輩教師の中に憧れで理想の日本語教師はいたが，自分にはなれない，下手に真似たりするとただの面白くない教師になってしまうだけ，自分のできること，自分なりに分かりやすい授業さえすれば学生がきっとついてきてくれるだろうと自分のスタイルを自覚して，自分のスタイルを追求してきたと言う。

一方，Ｂさんは，たくさん学べた存在ではあるが，憧れではない。先輩も今の同僚も，個々の教師にそれぞれ個性，特徴があり，１人に絞って理想の教師とは思わない。その中から自分にとって参考になるものを吸収して自分の授業スタイルを形成していく。「理想の，憧れの日本語教師とは，楽しいだけではなくて，ちゃんと分かる，分かりやすく，クラスもちゃんとコントロールできること」だと言っている。

③ プライベートな話しを使うときのねらい

二人とも授業中，よくプライベートの話しをする。Ａさんは語彙説明のときでも文章理解のときでも随時プライベートの話しを用いる。また，Ｂさんの場合は，文型導入や文型説明などはほとんど実話を使っているし，対話的に随時学生とプライベートの話を交わしている。しかし，そのねらいとして，Ａさんは，分かりやすさ，馴染みやすさ，興味の持ちやすやを重視し，Ｂさんは分かりやすさ，馴染みやすさに，プラスして，日本文化との触れ合いというねらいもある。

④ 学生との人間関係

Ａさんの場合は，「今のお仕事をされていて，仕事の中で一番自分にとって意味があるなと思われる瞬間とはどういうときか」という私たちの質問に対して，「う～ん，それがあるからやってるんだと思うんですけど。なんでしょうね。最初に来たときに話せなかった学生が話せるようになるのは学生が頑張ったからですよね。なんでしょうね」と笑いながらも口が重くなってしまったのが印象的である。「昔は割りと町で学生と会ったりすると嬉しかったり，学校以外で話しができるのが嬉しかったりした」が，ある時点からその気持ちが変わって，「学校を出たらスイッチオフみたいな感じ」になり，授業でいろいろな「プライベートの話しを出している割には，プライベートを知られるのがものすごい嫌」になった。「海外に行

く前は，その頃はとにかく日本語を教えるという仕事がしたくてボランティアでもなんでもいいから，お金を払っていくプログラムでもいいからやりたいと思っていたが，今はもう仕事，いろいろある仕事のうちの一つ，という感じになっている」と言っていた。学生の進路の相談については，がんばって求めてきた学生には対応するが……，いろいろ続けてきてそうなっちゃったんですかね」と言っていた。

一方，B さんの場合は，クラスの学生で「先生」ではなく「ママ」と呼ばれる場合がある。また，B さんのほうから学生のことを「ちゃん」つきで呼んだりすることもある。授業中，飛び火のように冗談を言ったり，傍観者である私たちがはらはらするような形で学生を注意したりしていて，冗談の世界と真面目にやる世界が分離されている訳ではないが，学生は真面目にやるときはやっているし，そうでないときはのっているしという生き生きとした授業雰囲気が印象的だった。学生との信頼関係を作るための工夫について聞くと，特に意識して何かするということはないが，授業での様子がおかしかったら授業後に声をかけたりして，いろいろ進路指導もしていると言う。A さんは「ものすごい信頼関係。よくよく面倒をみたり話を聞いたりというのを繰り返しているので，そうなっていると思う」と B さんの学生との信頼関係について語った。母親がわりのようなことをやってくれているからこそ学生も「ママ」と呼んでいるのだと考えられる。

V　本研究の到達点と今後の課題

V-1　本研究の到達点

① 日本語教師の授業スタイルの存在

教科書を中心に説明と伝達，また訓練を主な課題としている日本語教師においても，その教師なりの授業スタイルが存在することを明らかにできた。授業スタイルは教師の個性にも還元できないし，また一方教師の技術にも還元できない。その授業スタイルは日本語教師が授業を遂行していく上でとても重要な役割を果たしていることを明らかにすることができた。

② 授業スタイルの形成における経験・実践的知識の重要性

授業スタイルの形成は，ライフヒストリー的なアプローチによってどのような経験や実践的知識が関係しているか，その一端を明らかにすることができた。

③ 人間関係，異文化観の影響

日本語教師の場合，生徒との人間関係をどのように考えるか，生徒や教師自身のプライバシーについてどのように考えるか，また日本語を教える際に言語教育だけでなく，文化の教育だということをどれくらい考慮しているか，という点が授業スタイルに大きくかかわっているのではないだろうか。日本語教師は単に日本語という語学教育を専らにしているのではなく，否応なく，日本における異文化交流の最前線にあり，まさに草の根の国際交流の現場における当事者なのである。

V-2　今後の課題

「個別事例研究の一般化の問題」と「事例研究としての深まりと広がり」が課題として残る。

少ない事例を丁寧に追うことで明らかにできたこともあるが，しかし，それは個別事例研究にとどまっていて，その結論を必ずしも一般化することはできない。方法論的には他分野，他領域における個別事例研究の課題を共有しているものと考える。

また，教師自身になかなか聞けないことがある点である。例えば，今回のインタビューであまり踏み込むことができなかった点は，日本語教師をめぐる社会的環境についての意識の問題だったと考えられる。A さんのインタビューから A さんの日本語教師としての「不安」や「未来への展望の危うさ」を感じたが，その話題となると，口が重くなって，話がとぎれてしまった。しかし，未来への展望の中で授業スタイルの

形成が行われていくという意味ではこの問題はきわめて重要な要因である。その際には，日本語教師をめぐる客観的な状況（キャリアラダーの不在等）も問題になるだろう。

さらに，視点の変換も必要である。それは，当事者のインタビューという主観的な方法論を補っていくという意味もある。例えば，内容が授業を実際に受けている学生の目から見てどうかという点の検証もこれからの課題だと考えている。

謝辞

三村隆夫校長をはじめ，四日市日本語学校のご協力に感謝いたします。

引用・参考文献

1）佐藤学：授業研究入門，岩波書店，東京，85-114，1996

2）藤原顕：教師のライフヒストリーの理解に基づいた授業研究―実践的知識としての授業スタイル把握から力量形成に迫る事例研究に向けて―．教師の力量形成へのライフヒストリー的アプローチ―授業スタイルにかかわる教師の実践的知識を中心に―（平成 14 ～ 15 年度科学研究費補助金基盤研究（C）(1) 研究成果報告書）代表者　森脇健夫，1-18，2004

3）横溝紳一郎：日本語教師養成・研修における「教師のライフヒストリー研究」の可能性の探求．日本語教師の成長と自己研修（春原憲一郎・横溝紳一郎編著），凡人社，東京，158-179，2006

4）森脇健夫：教師の力量形成としての授業スタイルとその形成．学びのための教師論（グループ・ディダクティカ編），剄草書房，東京，167-192，2007

5）同上，173-174

6）森脇健夫：ライフヒストリー的アプローチに基づく教師の授業スタイルの研究―奈良女子大学附属小学校の学校文化との「出会い」と授業の変革に焦点を当てて―．ライフヒストリー的アプローチを活かした総合的な教師の力量研究―新たな教員養成プログラムの開発を見据えて―（平成 16 年度～ 17 年度科学研究費補助金基盤研究（B）(1)研究成果報告書）代表者　森脇健夫，51―65，2006

7）ウヴェ・フリック：質的研究入門，春秋社，東京，94-121，2002